

第1回アーティスト・トーク

展覧会に関連したテーマを切り口に、荒木珠奈さんが今一番話したい相手と対談しました。

開催日時：2023年7月22日（土）14:00～15:30

ゲスト：五十嵐泰正氏（筑波大学人文社会系教授、上野まちづくり協議会事務局アドバイザー。専門は都市社会学／地域社会論。）

テーマ：展覧会のこと・上野のこと

会場：東京都美術館 交流棟2階アートスタディールーム

参加人数：44名

[はじめに（本展担当学芸員 熊谷）](#)

[展覧会について（荒木珠奈氏より）](#)

[1章について](#)

[2章について](#)

[3章について](#)

[4章について](#)

[上野でのリサーチについて](#)

[「上野」の土地と歴史について（五十嵐泰正氏より）](#)

[終わりに](#)

はじめに（本展担当学芸員 熊谷）

東京都美術館の熊谷と申します。こちらの展覧会を担当しております。

今日は、展覧会関連イベントで、荒木珠奈さんが今一番お話をしたい人のお話を聞く、お話をするというプログラムです。

本展について補足してお伝えすると、当館では2012年のリニューアルから学芸員が企画した展覧会として毎年夏に「企画展」を実施しています。「アーツ&ライフ展」、「アーツ&ケア展」、「現代作家展」という3つのカテゴリーがあります。「アーツ&ライフ展」では2022年に「フィン・ユールとデンマークの椅子」を開催しました。「アーツ&ケア展」では、2021年に「Walls & Bridges」展を、また来年2024年に開催を予定しています。「現代作家展」では2018年に「伊庭靖子展」を開催いたしました。この3つのカテゴリーの展覧会を順に開催しています。

今年は「現代作家展」のカテゴリーで、荒木珠奈さんに私共からご依頼をし、展覧会を開催する運びになりました。

チラシなどの広報物では「子供から大人まで楽しめる、ちょっと怖くて、懐かしい展覧会のはじまり、はじまり！」というキャッチコピーを使っています。既にギャラリーで展示をご覧になった方も、そうでない方もいると思いますが、会場となっている当館のギャラリーの構造は、地下1階からはじまって、さらに下に降りていくという構造になっております。その地下空間で、日常と非日常の境界を行き来するよ

うな「不思議な旅」をしていただけたらという趣旨で企画を立てていただきました。今回の大きな見どころは、「上野」に着想を得た新作です。荒木さんには上野をテーマにした新作をご依頼し、ギャラリーで一番大きい空間であるギャラリーAに、その新作インスタレーションを展示しております。

今日はその新作のテーマでもある「上野」というテーマを切り口に、五十嵐泰正さんをゲストにお呼びしております。荒木さんと五十嵐さん、お二人のトークを皆さんに楽しんでいただけたらと思います。

では、最初にお二人をご紹介します。荒木珠奈さん、そして、五十嵐泰正さんです。

すでに、展覧会のチラシなどでご覧になっているかもしれませんが、改めてご紹介します。荒木さんは東京都出身で、メキシコ留学時代に版画と出会われて、90年代から2020年代の現在まで、作家としてのキャリアを築いてきておられます。今はニューヨークにお住まいでして、オンラインで打合せなどを行い、準備を進めて参りました。この展覧会のために来日していただいています。

一方の五十嵐さんですが、筑波大学の教授、またもう一つのお顔として、上野まちづくり協議会の事務局のアドバイザーもなさっておられます。学生時代から、社会学的なフィールドワークをなさっておられまして、地元での活動や上野のまちづくりなどにも関わってこられています。

五十嵐さんのご著書である『上野新論』を荒木さんが新作りサーチの折にお読みになったこともあり、ぜひ五十嵐さんにお話を聞いてみたい、お話ししてみたいということで、今回のトークが実現することになりました。

まずは、荒木さんから展覧会のご紹介をしていただきます。その後、荒木さんが上野をテーマとする新作を作るにあたって行ったりサーチについてご紹介をしていただきます。続いて、五十嵐さんから、上野という土地に関するお話をいただきます。その後、ある地域に関してリサーチを進める時には社会的なアプローチや現代アートのアプローチがありますが、そうしたりサーチに関するクロストークを予定しております。最後には会場のみなさんからのQ&Aの時間を取りたいと思っております。

ではさっそく荒木さんから展覧会をご紹介します。

展覧会について（荒木珠奈氏より）

みなさまこんにちは。今日はいらしていただきありがとうございます。

今日から始まりました、「うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈 展」を見ていただいた方、と、まだご覧になっていない方がいらっしやると思いますが、1章、2章、3章、4章と、順を追って、お伝えしつつ、自己紹介させていただきます。

今スライドで映っているのは、展覧会の見どころで、これは4章の大型インスタレーションのドローイングです。あとでこの作品についてはお話しします。

1章について

1章『旅の「はじまり、はじまり」』ということで、私は旅とか、どこかに移動するとか、そういうことをテーマにした作品を、初期のころから好きで、よく作っています。この展覧会は年代順にはなっているわけではなく、章ごとに、いろんな年代の作品を混ぜて展示しています。一番古いものは1994年の作品から、2023年の新作までを混ぜて紹介しています。こちらはギャラリーCを上から見た図面ですが、ここには、大きい立体と小さい立体と、たくさんの銅版画、旅をテーマにしたものと、あとは、メキシコを

テーマにした作品を、主に選んでいます。一番奥のちょっと天井が高いところは、《Caos poetico (詩的な混沌)》(1995年)というインスタレーション作品を展示しています。この作品は、メキシコで最初に展示した後、東京都現代美術館で、大規模を大きくして、展示をしました。日本で展示をするのは、今回が5回目になります。この作品は、参加型作品です。みなさんも、この紙のおうちをひとつ選んで、コンセントにつなげて灯りをともして、インスタレーションに参加することができます。ぜひやってみてください。

ギャラリーCの高い天井の方には、銅版画の作品を展示しています。左端は《はじまり はじまり》(2003年)という作品で、この展覧会のために作った作品ではないのですが、このようにカーテンや、舞台の幕が開き、何かはじまる瞬間とか、物語を感じさせるものが好きでよく作っています。次は、凍った川の上を、船に荷物を入れて、運んでいる親子、というような銅版画です。多分ヨーロッパだったと思いますが、そこで見つけた古い絵葉書の上に、3人の家族の姿を描き加えた写真製版の銅版画です。これは4つのポストカード、旅先から届いたポストカードというイメージで作った作品です。このシリーズは、「手紙が届く日」というタイトルの個展のために作りました。旅先から届いた手紙というようなイメージで、肩にインコを乗せた旅人が色んな所に佇んでいる銅版画のシリーズです。こちらの作品では、旅人が知らない街で泊まったベッドの上にあります。《夜中、知らない国で目が覚めたら月が黄色かった》、《夜中、知らない国で目が覚めたら月がピンクだった》、《夜中、知らない国で目が覚めたら月が青かった》(2000年)、という作品です。

次は、2章の方で出てくる作品にはインスタレーションの素材として使っていますが、「マゲイ」という植物を描いたシリーズです。「マゲイ」というのは、日本語では「リュウゼツラン」と呼ばれる植物です。見た目は「アロエ」が巨大化したような感じの植物で、その植物から採れる繊維があります。それは、メキシコでは昔からすごくよく使われていて、日本での「藁」みたいな使われ方です。その植物の形態とか歴史にも惹かれるものがあって、メキシコ滞在中の2004年に描くようになりました。その植物から採れる繊維もすごく魅力的な素材で、インスタレーション作品《見えない》の素材に使っています。

また、《道》(1995年)、《無題》(1995年)など、割と大型の立体作品も作ってきました。この《無題》の額縁の中には絵がなくて、その代わりにタイトルのように額縁の下の部分に小さいつまみが出ています。それを回すとこの中でオルゴールが鳴るという作品です。こちらもつまみを回して音を鳴らすことができるので、ぜひ体験してみてください。

これ(《Una marcha de los esqueletos (ガイコツの行進)》)は今回の展覧会ビジュアルにも使っています。メキシコには「死者の日」というのがあります。日本のお盆みたいなもので、死者が色んなガイコツとして表現されていて、祭壇や町中に飾り付けられるのです。そのガイコツが色んな職業をしていたり、お酒を飲んでいたり、楽しそうなのです。死者の魂をお迎えする日なのですが、同時に生を感じる日です。そんな、私がすごく惹かれるメキシコの「死者の日」という文化をテーマにした作品です。

他にもメキシコをテーマにした作品がありますが、当時、友人がメキシコシティで、メキシコと日本の交流をテーマにしたフリーペーパーを作っていました。その表紙のシリーズとして作った作品です。なので、メキシコなのだけでもサボテンと弓を射っている人が混ざったりとか(《Carlos y Maria(加溜呂須と麻梨壺)》)、日本とメキシコが混ざったようなイメージのものもあります。この作品(《La onda de Hokusai a la Mexicana (北斎の波 墨国風)》(2005年))は、北斎の浮世絵から波の部分をコピーして、メキシコシティ、ソチミルコ地区の舟遊びの文化のイメージと混ぜたものです。

2章について

2章には、『柔らかな灯りに潜む闇』というタイトルがついています。

まず、この展示室に入ると見えるのが《うち》というインスタレーション作品で、これはかなり古くて、1999年に作りました。これは私が生まれてから10歳までの間に住んでいた団地をテーマにした作品です。団地というのは、画一的な白い建物の中の、同じ間取りの中にたくさんの人が住んでいます。でも、それぞれの家の中には違う家族構成の人たちが住んでいて、それぞれに違う生活があって、違うドラマがある、というようなことを表現したくて、外側はよくある合板を白く塗ったものです。内側は、蜜蝋を塗って、ちょっと温かい、、、「うち」という言葉には「家」っていう意味と、内側の「内」っていう意味も込めています。なので、内側は、温かくて、身体の内側みたいな、有機的な感じを出すために蜜蝋を塗っています。そこに、色々な家族のシルエット、色んな家庭のシーンのシルエットがカーテン越しに浮かび上がっているような銅版画を貼ってあります。33種類の銅版画の絵柄を、数色の紙とインクの組み合わせで作ってあります。これも参加型で、お客さんがカギを選んで部屋の鍵を開けることができます。

そして、「うち」を展示している壁の裏側、背中合わせにあるのが、この《見えない》というタイトルのインスタレーション作品です。これは2011年の震災（東日本大震災）直後に作った作品ですが、原子力発電所が事故を起こし、放射性物質が飛んでくる、空気中に浮遊しているということに、ものすごく、恐怖感を持ちました。さらにそれが、目に見えない、匂いもしないということに、恐怖感と嫌悪感と。それを表現するのに、先ほどもお話しした「マゲイ」という植物の繊維を使いました。「マゲイ」の繊維は、元々はアイボリー色ですが、それを黒く染めて、お団子状に丸めて、その集合体を壁と天井に設置しています。加えて、それに関連するテーマで銅版画を作りました。

この作品（《地震の後》（1995年））だけは、2011年の震災ではなくて、神戸（阪神・淡路大震災）の直後に作ったものです。

3章について

3章、『物語の世界、国境を超える蝶』という章です。

展示室を上から見ると、真ん中に4つの柱がある部屋だったので、そこを囲って、カーペットを敷いて、リラックスできるような部屋をつくりました。その部屋の周りにたくさんの銅版画と、立体作品と、コマ撮りアニメーションを展示しています。

「サーカス」というのもすごく好きなモチーフです。非日常性と、数日経つとそこからいなくなってしまうということと、なんかちょっと寂しくて、でも電球とかがキラキラしていて、奇妙な芸をする人たちが見られるっていう、そういうところにすごく惹かれます。これら《曲馬》（2001年）、《玉乗りの娘》（2001年）、《サーカス前夜》（2001年）、《つなわたり》（2001年）が、サーカスのシリーズです。ほかにも《終幕》（2002年）、《本の中の劇場》（2009年）などは、カーテンが開く、とか、カーテンの中に別の世界がある作品です。カーテンという、たった1枚の布の装置を隔てて、違う世界が開いて、見ている人たちはそちら側へ入っていきける、という事もすごく面白いことだなと思っています。

この作品は《牛レストラン》（2001年）という作品です。牛の体の、肉の部位を示した図みみたいなものが立体になっていて、各部位が部屋みたいになっていて、そこでお肉を食べているようなテーブルがあったり椅子があったりという作品です。

この2つ（《Lluvia del jaguar(ジャガーの雨)》(2008年)、《うさぎの月夜》(2008年)）もメキシコ滞在中に、現地で見たと祭りなどがモチーフになったりしています。

舟や、手、蛇、雨、など、繰り返しテーマにしているモチーフもあります。色で言うと、私は赤がすごく好きな時代がありまして、赤を多用していました。

次は小松未季さんという私の友人が書いた詩とコラボレーションして作ったシリーズです。

《NeNe Solー末っ子の太陽ー》(2011年)はメキシコのレニャテロス工房という、手漉き紙、本、ポスターなどを作っている工房がありまして、そことコラボレーションして作成した絵本です。

《迷惑なコヨーテ》(2007年)はコマ撮りアニメーションなのですが、メキシコのチアパス地方に住んでいるマヤ系先住民の女性たちが、自分たちが着る民族衣装のウールの端切れなんかで作り始めた、動物のぬいぐるみを使っています。これらは、お土産品として、売られていますが、とってもユニークでかわいかったので、それを使って、マヤ系先住民の女性が書いた寓話をアニメーションにしました。

《cocoon・赤》(2018年)、《cocoon・白》(2018年)は町田市立国際版画美術館で展示した作品です。町田市で明治から昭和にかけ盛んだった養蚕をテーマにしたインスタレーションと銅版画作品を作りました。

『繭』のシリーズの銅版画です。『繭』シリーズはニューヨークに移住してから作った作品です。元々、人が移動すること、どこかに移住して生活すること、旅とかそういうことには興味を持っていましたが、自分も移民という立場で生活するようになり、更に、中南米の人がたくさん移住してくるアメリカという所に住んだこともあり、ニューヨークに移住してからは、移民や越境、ということテーマにするようになってきました。

次は、蝶々型のテント《むかし、むかし…》(2022年)についてです。「モナルカ蝶」という、北米とメキシコとを「渡り」をする蝶々がいて、北米から約4500kmもの距離を飛び、毎年同じ場所の森に来て、越冬して、卵を産んで、また次の世代が北米の方に飛んで戻っていく、というのを繰り返している蝶々です。メキシコでこの森に行って、実際に越冬している蝶の大群を見に行ったことがあります。この蝶々は、アメリカでも、移民の象徴のような捉えられ方をしています。蝶々ってこういうふう（作品に描かれているように）地面にはとまらないのですが、とまったらテントみたいに見えるなと思いました。蝶々の形をしたテントの中に、灯りがともっていて、人が安心できる、一時避難するスペースみたいなイメージです。

《Refuge 1》(2021年)、《Refuge 3》(2021年)という立体作品も、そういうイメージです。そして、移民、移住について考えている中で、いろいろ問題にはなっていると思いますが、日本の移民政策とか外国人政策についてもやはり興味があります。

去年、2022年の夏に都美でワークショップをしました。日本の子供達と、日本に住んでいる外国にルーツが子供たちに集まってもらい、それぞれ紹介したい昔話を一つ持ち寄って、みんなで紹介する、ということと、大きな紙をパルプから作って、蝶々の形のテントを作る、というワークショップをしました。すだれとアミを木の枠の上に広げまして、その上に木工ボンドを混ぜたパルプを広げて、そこに、子供たちの手形とかを残してもらいながら、大きな紙を作りました。それを乾燥させて、ベニヤ板で芯を付けてテントに組み立てたものが展覧会に出品されています。それと各自、手漉きで小さい紙も作りました。去年の夏だったので4月ごろから、日本にもウクライナから避難してきた家族が台東区にもいまして、参加してもらうことができました。『てぶくろ』という有名なウクライナの昔話があります。みなさんも

ご存知だと思いますが。ウクライナの子が『てぶくろ』を紹介してくれました。加えて、一人1冊ずつ蛇腹状の本を作ってワークショップは終わりにになりました。中国出身の子、ウクライナ、タイ、ベトナム、インド、それからアメリカ、日本人だけどアメリカで育った子達が来てくれました。

4章について

そして、これは4章、『うえののそこ（底）を巡る冒険』。いよいよ一番最後、地下3階まで下りてきて、今回の上野をテーマにした、新作のインスタレーションの部屋になります。これは、イメージドローイングです。こんなものを作りたいっていうものを描いたものです。これが今日の展示風景写真です。とにかく大型なので、今回かなり制作には苦勞しまして、色々な人の手と知恵をお借りしてやっと出来上がった作品です。設計図面とか、コンピュータグラフィックでシミュレーションしたり、いろんな過程を経て出来上がりました。

《記憶のそこ》ドローイング 1(2022年)は、この大きな籠のような立体作品の中に入って上を見上げた時のイメージで、鏡のような、銀色に光るものがたくさん張り付いている、一番最初の頃から、私が持っていたイメージです。この籠のようなイメージはどこから来たのかというと、銅版画《Days》(2021年)のように普通の鳥籠の様なものを描いていました。鳥籠の持つ、自分が飼っている大切な鳥を守っているようで、でも鳥としてはそこから飛び立てない、閉じ込められているという二面性。トランプ政権になって、メキシコとの国境の間に壁を全部作ると言いながら、途中までしか作れなかった壁。その壁の構造、四角い金属の柱をドンドン立てて壁にするような、そのビジュアルにも由来しています。中南米や他の国から、国境を超えてアメリカ側に入ってきた人たちを収容する、檻のような施設。それと、コロナ禍でロックダウンになり、家に閉じ込められた自分の閉塞した気持ちが重なっています。

私はメキシコにも合計で4年半住んでいました。アメリカとメキシコ間の国境を歩いて渡ったことは一度だけ昔にありましたが、壁を意識して渡ったことが無かったので、3年前くらいにテキサスまで飛行機で行って、国境を、メキシコ側に歩いて渡って戻ってくることをやってみました。その時に、メキシコ側の街シウダー・ファレスに行ったのですが、そのすぐ近くに、トランプ政権になってから新たに建てられた棒状の壁が建っている場所がありました。それも見に行ってきました。そのような体験を経てできたものが、インスタレーションの《Itinerant Eyes》(2022年)です。

この作品では床に置いたケージ(籠、檻)を陶器で作ってみました。焼き物です。いろいろな大きさのものを20個作ってインスタレーションするという個展を、2022年3月にニューヨークで開きました。今回の新作では、そのケージを巨大化して、中に人が入るようにしてみたいと考えていました。

上野でのリサーチについて

ここから上野のリサーチの話をしていきます。新作を作るにあたって、上野ってどういうところなのだろうかという点からリサーチを始めました。

私は普段アメリカに住んでいるので本とかインターネットの情報から入ったのですが、とにかく上野にはすごくトピックが多くて、歴史もあるし、各方面にかなりディープで、どこを切り取っていいかわからない状態になってしまいました。ですから、一つのこと言及して作らなくても良いのかな、と。たくさんの方が入ってきて、上野に住んで、生活したり、出て行ったり、通り過ぎたり、外国からやってきたり、ここから外国に出て行ったり。そういうたくさんの方の出来事や人を受け入れてきた町、土地であるというこ

と。懐が深い町であるというような、ざっくり言うとそんなことをテーマにして、新作を考え始めました。

私が気になったトピックスは、新作インスタレーションの中で映像のスライドショーとして、壁や床などの3カ所に投影しました。時系列ではなく、ランダムに見せています。

今、上野公園を歩いていると見えないようなたくさんの出来事が、この土地にはあったということを、展示室はこの美術館の地下3階にありますが、地面の下にもぐって、過去の出来事が今の出来事と混ざって、そこに現れている、見えてしまう、というようなことを考えて映像の部分は構成しました。

これは、上野公園の中にある、文化会館の近くのパンダ橋っていう橋のたもとにある、ムクノキです。これは上野公園を紹介した本でこういう木が公園内にあるっていう話は読んでいました。2022年の夏だったと思いますが、初めて見に行った時には、今回の新作「記憶のそこ」のラフな構想はありました。ですから、中が空洞になっているムクノキ。入口みたいな感じで、人のシルエット型に、形が抜けている、このムクノキを見た時に、私がこの上野公園で、抽象的な感覚ですが、これを作ることは、何か意味のある事なのではないかな、という漠然とした感覚を得た木で、私にとっては、大切な木です。

これらは私がリサーチしながら集めて、作品の中でも使っている映像ですが、現在のアメ横です。「パンダの赤ちゃん命名おめでとう」「マスク着用」とか書いてあります。次の画像は、戦後すぐくらいかもう少し経ってからか、まだアメ横が闇市と言われていた頃の写真です。

上野はいろんな国の人が、パッチワーク状に住んでいる所のように。御徒町の方には宝飾街があって、インド人の方々が昔からよく宝飾を扱っているということを聞いて、行ってみました。その街の中で、中国の飾りをつけた不動産屋さんとかもあって、中国系の人が不動産業をやっていたり、いろいろ混ざっているんだ、ということを実感しました。日本語表記があって、日本語も絶対通じるお店なのでしょうが、細かいところを見ると、ちらっとこういうシールが貼ってあったりして、おもしろいなと思ったりしました。

これは御徒町の宝飾街の街角ですが、日本の神様の前にインドの神様の像が置いてあり、共存している感じが表れていていいなと感じました。

さらに、これはアメ横にあるセンタービルの地下ですが、外国みたいな感じで、肉や魚、食料品ですね。すごく面白い所で、色んな人種の方が買い物に来ていて。私はニューヨークに住んでいてチャイナタウンで買い物することが多いのですが、チャイナタウンと全く同じ匂いがしました。一方で、有名なたたき売りなんかもいまだにある。こういう「アイラブパンダ」とか、数年おきにブームになるんでしょうか。今ブームになって、今売れる物をとにかく売るっていうのがアメ横のやり方みたいなものも健在でした。店の外にテーブルを出して屋台でいろんな国の料理が食べられるっていうのは近年流行っているようです。アメ横の外の屋台で食べたりすると、お店の人も外国人で食べている人も外国人で、日本人は私だけ、のような時もありました。

これは去年の年末辺りに弟に撮ってきてもらった写真です。これは今年の1月、アメ横の風景です。現在の上野駅の写真です。これは行商人の写真です。昭和の何年ごろまで続いていたのか分からないですけど、地方から、野菜なんかを担いでくる行商人の人達がいきました。東洋初の地下鉄は、上野ー浅草間で開通したそうです。

これは現在の上野駅で猪熊弦一郎の壁画があります。これは、上野駅のすぐ近くにある『あゝ上野駅』と

いう歌の碑です。集団就職の様子を表した歌と当時の写真のレリーフです。これが昼間の写真で、こちらが夜です。夜になるとホームレスの人がこの碑の裏で寝ていて、なんか何とも言えない風景だなどおもいます。

こちらは京成上野駅。スカイライナーが発着している駅です。私の個人的な思い出ですが、スカイライナーに乗って、1991年だと思いますが、ここから初めてメキシコに行ったので、それがすごく強く記憶に残っています。今回、全く用事はなかったのですが京成上野駅へ行って、入場券を買ってスカイライナーが発車するのを見送ってみました。

これは摺鉢山古墳です。上野公園の中に大きな古墳がいまだに残っています。登って上に上がると、ただの土の山ですが、そういう古墳が残っている所です。これは、上野がこんもりした山だったということがわかる絵なので選びました。「山門摺鉢山花見」と書いてありますが。これは寛永寺ですね。寛永寺ができたのは1625年だそうです。この上野公園、今でも寛永寺の名残はいくつか公園とか公園周辺に残っています。そしてこれは、1868年の戊辰戦争。この公園内でこういう戦争があって、たくさんの人が亡くなったという歴史もあるのです。

そして、上野公園が公園として、それも、日本初の公園として制定されたのが、1876年、明治9年のことで、「公園にしよう」といった人が、このボードワン博士という人だったそうです。これは博覧会。第一回内国勸業博覧会というものが開催されました。当時日本で初めての、市電とか、ランプとか、絵画展とか、日本初のものがたくさんこの上野公園にやってきて、沢山の人の目を驚かせたのです。これはガス灯、ランプを見て驚いている人たちです。で、そのあとに博物館ができたり、こちらは国立西洋美術館ですけれども、今でも重要な美術館と博物館が集まる、ハイアートを見るために人が集まる公園となっています。

これは、西郷さんですね。西郷像ができたのが明治30年ごろでしょうか。これが今の西郷像です。今では西郷像っていったいどこにあったかな、とちょっと不思議に思うような場所に西郷さんは置かれていますが、昔は公園の正面の大きな階段を上った上に西郷さんがそびえたっているというような、象徴的な像だったようなのです。今は、駅から公園に入って、左のほうにずっと歩いて行かないと西郷さんには会えない、ちょっと不思議な場所になっています。

これは、今も残っている寛永寺のお寺とか建造物です。根本中堂の現在の写真です。今もありますけど、モノレールも日本初で、上野の動物園の中に作られたそうです。

これは、ミロのヴィーナスが来た時の展覧会ですが、社会現象になるような大人気の展覧会になったそうです。

次は、科学博物館です。これは去年の夏に私が科学博物館で見た展覧会の展示物のひとつですが、蚕の体を作った立体物で、おそらく、養蚕の教育用に作ったものだと思いますが、パカッと開けると蚕の内臓や、どうやって絹の糸が作られるかが分かるようになっていて、それが、すごくかわいかったので撮りました。

私がいつも象徴的だと思う風景があります。博物館とか美術館で展覧会を見た後に公園の中を歩くとホームレスの人のブルーテントがあったり、キリスト教の団体の人がご飯を配っていたりとか、そういう風景が混在している上野って、とらえどころのない不思議なところだと思います。

それと、これは上野公園から不忍池の方を見下ろした写真で、これを見ると上野公園が岬、高台にあったのだということがよくわかります。これは夏の蓮の池の写真ですけれども、これは昔の浮世絵ですね。

そしてこの『月の松』というのは、今も何代目かで残っています。

これは2023年2月に私が撮った不忍池の写真です。この蓮の葉が全部枯れて、オレンジ色の茎だけになっていて、さらに、鶺鴒、黒い鳥が鶺鴒だと思のですが、鶺鴒がとまっている木が、鶺鴒の排泄物で真っ白になっています。蓮のオレンジ色の茎が一面に突き出ている池と、島には真っ白な木に黒い鳥たちがいて、舞台装置みたいで、すごく象徴的な、劇場的なシーンだと思って撮りました。

これは戦後に、焼け野原になってしまった上野公園の中の写真です。これは開園当初の上野動物園の当時の入口で、この入口は、今は出口としてしか使われていないのですが、東京都美術館の西側にあります。昔の上野公園の写真です。これは、ジャイアントパンダが初来日した時の写真のようですが、パンダが全然写っていないくて、人ばかり写っていて、それが面白いなと思い、選びました。

このリサーチを始めてから、上野動物園へも何回か行ったのですが、これは動物園の中のちょっとくぼんだ所にある、鶴舎です。最初見た時に気になって写真に撮りました。他の動物の檻は、みんな作り替えたりしているそうですが、鶴舎は唯一開園当初からあるものだそうです。上野動物園で有名なのは「かわいそうな象」の話だと思いますが、動物園の中には結構大きな動物のお墓がありました。これは動物達のお墓を壁越しに覗いたところです。

上野の町を歩いていると、いたるところにパンダのモチーフが使われていて、一生懸命パンダで上野を売り出している感じがなんとも面白いなと思います。

これは関東大震災の時の写真で、当時、パニックになった人たちが、広くて高台にある公園に押し寄せていったということがわかります。これも大震災の時の写真です。これは、象徴的な写真だなと思いました。人探しの札ですが、家族とバラバラになってしまった人たちが、苗字とか、どこにいるとか書いた札を、西郷さんにたくさん貼り付けている様子です。この写真はその後絵葉書になって売り出されていたようです。これは上野公園の高台から上野駅の方を見たときに見えた、焼け野原になってしまった風景です。これは関東大震災アーカイブスのビデオの中からのスクリーンショットです。そして、上野公園の中には大仏がありますが、地震でその大仏の頭が落ちてしまった様子です。これは避難民でごった返す日暮里駅です。

これは、戦後の浮浪児。「駅の子」とばれていたそうです。親がいなくなってしまった子供たちが、上野公園とか上野駅に住んでいたそうです。これは林忠彦さんという写真家の写真です。こちらもそうです。これは上野駅構内の写真です。今、上野駅の地下道を歩く時、ああ、この辺に子供たちが寝ていたのかなあ、と思いながら歩いています。

これは1992年の写真ですが、西郷さんの下にある大きい階段です。公園ができた当初からある、すごく古い階段ですが、その辺りと西郷さんの辺りに、バブル期の終わり頃、イラン人がたくさん集まって、情報交換していた時の写真です。

そして唐突ですが、これは私のおじいさんの写真です。台東区のリサーチを始めてから、私のルーツが浅草にもあるということ思い出しました。おじいさんは、曾おじいさんの代から、浅草で「野田屋」という割烹料理屋をやっておりました。「野田屋」は浅草寺のすぐ脇の辺りにありました。おじいさんは太平洋戦争が始まって招集されて亡くなってしまったのですが、東京大空襲でお店も焼けてしまいました。その東京大空襲の日に、おばあちゃんと、私のお母さんとかきょうだい達は、逃げ遅れて、近くにあったひょうたん池に逃げたらしいです。ひょうたん池は人口の池ですが、当時、一大歓楽街だった浅草にあった池で、周りには映画館とか、浅草十二階っていう、当時としては画期的に高い塔があり、観光地になって

いたそうです。その池に逃げ込んだそうです。そこで、たまたま近くに消防署があって、消防隊が一晩中池に逃げ込んだ人の上に水をかけ続けていたので、生き残れたのだそうです。しかし、この池は、その後埋め立てられて、今は場外馬券場のビルになっておりまして、すごく殺風景な風景になってしまっています。

ひょうたん池の周りは藤棚が有名で、藤棚を見に行く人が多かったらしいです。この写真もまさに藤棚かなと思うのですが。どなたかのブログで、初音小路という浅草の小さな飲み屋街にある藤棚はひょうたん池の藤棚の名残だ、と読んだので、今年の2月に見に行ってみました。大きい建物とかは壊されたり無くなっても、植物は代替わりして続いていくので、今でもひょうたん池の藤が残っているのであれば、すごいなあと思ったのですが。

これは、一昨年夏に撮った写真です。この藤棚がひょうたん池と関係あるかどうかは、当時は全く知らず、ただ藤棚の下で飲んでいるおじさんたちがいて、なんかいいなあと思ってパッと撮った写真でした。今年の2月にその藤棚をもう一度見に行ったら、全部切られていました。根元の方は残っていたのですが、上の方はもう棚にはなっていないで、呆然としていたら、たまたまその角にあった飲み屋からおばさんが出てきたので聞いてみました。「ここ藤棚全部切っちゃったんですね」って聞いたら「そうなのよ。ここは観音様に借りている土地だから、観音様が取って、って言ったら全部取らないといけないの」と。それで切ってしまったようなのです。すごく残念だと思って。このおばさんは、この写真の中の左に切れてしまった飲み屋さんの女将さんで、もう今は働いておらず、次の代に任せていると言っていました。女将さんは70代だということで「この藤はひょうたん池から続いている藤だって聞いたんですけど」と聞いてみたら「あらそんなの嘘よ」って。(笑)「50年位前に私たちが植えたんだからそんなの嘘よ」って言われまして、ああ、ちょっと夢が壊れたっていう感じ(笑)だったのですが。ここでは一番古い店だということで、私のおじいさんがやっていた「野田屋っていうお店、知ってますか？」って聞いてみたら「知ってるわよー有名だから」とおっしゃいました。わあと思って、すごい！野田屋を知っている、生きている人に初めて会ったと思いました。「なんで有名なんですか？」って聞いたら「知らない！」って言われまして、「じゃあね！」っていう感じで行っちゃったのです。「知ってるわよ、有名だから」と言われましたが、よく考えたら女将さんは70代なので、東京大空襲で焼けてしまった野田屋をもし知っていたとしても、赤ちゃんだったりするんじゃないかなって、ちょっとどういうことかなって思っているのですけど。

今お見せしたのは、こういう所から借りたりしたものです。

熊谷：ありがとうございます。続いて五十嵐さんからお願いします。

「上野」の土地と歴史について（五十嵐泰正氏より）

改めまして、ご紹介にあずかりました筑波大学の五十嵐と申します。

僕は社会学という手法で、上野をまあ長らく研究をしてきているのと、先ほどご紹介あったように、上野のまちづくりに関して、色々な形で、関わるようになっていく、という者です。今、荒木さんのお話を聞いて、荒木さんの、今回上野っていうと一番大きなあのインスタレーションがあると思いますが、根っこですね、木の根っこがあってそこがイメージになっているという点に、僕はピンとくるところがあります。上野は確かに変わってきている、変化も流動性もすごく大きいんですけど、実は構造的なものは根

深いところで変わっていないところもあって、その変わらないひとつの物語の中で、その主人公がどんどん変わっていくようなことだと、僕はよく言うんですけども。ある上野の人が言ったことですが、「メンバーが総取り換えしても、ずーっと人気あるバンド」みたいなイメージがあります。これは上野の、独特な、地形がすごくユニークなので、そこにも由来していると思うのです。

そんな話を今日は中心にしていきたいと思います。加えて、随時、荒木さんがご紹介くださった写真にも立ち返って、ご紹介したりとかしたいなと思っています。

これは、幕末の上野の絵図ですが、これ、一発で上野って分かりますよね。実はそんなに変わっていないのです。ここに不忍の池があって、ここは今、公園ですけど、当時は寛永寺の境内ですよ。ここは、中央通り、いわゆる広小路でいまでも変わらず大通りとしてあって、当時は参道です。寛永寺は元々徳川家の祈禱所として建てられた所なので、神田、千代田の城からずっと繋がっているのです。御成道として参内に入っていくという基本的な構造があって、池があって、山があって、さすがに鉄道と駅はないですが、その代わりこれ今アメ横だってわかりますよね。当時は下級の御家人であるとか、町屋とかがごみごみ密集していた所。実は都市構造があんまり変わっていないというところが、わかるのではないかな、と思います。特性のある地形、なんですよ。

荒木さんから、すごく懐が深い、色んな要素があると、というお話が繰り返し出てきていたと思いますが、しばしば言われるのが、上野は山の手と下町の接点だっていうことです。これは地形的にも完全にそうになっています。これは地球温暖化で水面が 20 メートル上がったら、その地域が水没するかという図「Flood Map」です。見にくいのですが、世田谷区とか東京、新宿とかあります。手のようにはみ出して、指の間に水が入り込んでいるみたいな感じになっている地域がありますが、これがまさに山手の名前の由来です。手みたいに、台地が武蔵野から張り出しているんです、東京の地形って。まさに指の先っぽのここが上野の山です。上野から日暮里に向けて、山手線乗ると、ずっと崖になっていますよね。あの崖がこの指です。谷中は下町イメージあると思いますが、あの場所こそ、実は本来の山の手なのです。そこから下に入った不忍池から、アメ横方面、そして浅草の方は下町なのです。上野はまさにその接点になっているということが見えます。

実際に山手とか下町って言うと色んな歴史的、文化的イメージが強いと思いますが、元々は地形を表す言葉でした。

1914 年の一番最初期の東京のガイドブックなどでは、この言葉は地形概念として語られています。それが、地形だけではなく、階層的な違いとだいぶ重なっていることは、誰の目にも明らかでした。

今和次郎という人を知っている方もいると思いますが、建築家であり、社会学者というか、東京の町の色んな風俗などを、フィールドワークして、つぶさに見ていった人です。道行く人が、どんな靴を履いているか、草履を履いているか、足袋を履いているか、洋服なのか和装なのか、そういうことを見ていました。

当時、1925 年、関東大震災の直後くらいの時期ですけども、まあ色んなところで見ていくと、当時は身なり、洋装なのか和装なのかといったことと、職業や階級はかなり重なっていました。これは銀座で調査をしている今和次郎の写真ですが、そういう人間観察を中心にしたやり方で、深川の貧しいエリアなども含め東京の主要な各盛り場で調査した上で、今和次郎は上野に関してすごく面白いことを言っています。彼が調査した東京の 7 つの盛り場は、今でも繁華街としてにぎわってる街と結構似ているのですが、新宿、神楽坂、浅草、人形町、渋谷道玄坂、銀座、そして上野。こう 7 つの盛り場を調べていた時に、上野のことを「一番まんべんなく人の種類を吸収してゐる」というように書いています。なぜそういうこと

が起るかと言うと、「上品な紳士淑女」や「近代生活のトップを歩むモボモガの群れ」が美術展に集まっている一方で、「お上りさんを交えた花見客が宴を張っている」、つまり、上野にはその両方がいたってことを言っています。全く別種の「人種」が上野に集まっているという点で、東京の中でも唯一の際立った町だっているわけなのです。当時で言うと神楽坂や渋谷道玄坂では当然山の手の繁華街としてあって、でも一方でこちら側には、浅草とか下町があるという、でもその両方の種類の人たちの目的地が同じウォーキングディスタンスにあって、さらに、季節によってもその人種構成が変化する、これがまさに上野だっていることを言っています。当時からもこういう傾向がすごく顕著にあったわけです。まさにこの山と町の接点として上野があるというのがとても重要なところですよ。

先ほどの荒木さんの写真もこれから言及していきますが、まず上野公園はそもそも何かと言えば寛永寺の境内なのです。寛永寺が何かというと、徳川家の寺、ですが、ちょっと不思議なのは、徳川家のプライベート・ガーデンにしてもおかしくないところを、庶民にも開かれた場所にしたのです。最初に寛永寺を構想した天海っていうお坊さんがいますが、その構想が何かと言うと、京都とか滋賀など、当時の文化の先進の名所を上野に持つてくることによるある種の文化政策です。こんな素晴らしい文化を持ってきてくれるのが徳川將軍家だという御威光を庶民に浸透させようとしたのです。

荒木さんの写真を見ていくと、典型的で一番わかりやすいのが、先ほどご紹介のあったこの清水堂です。清水寺という、まさに京都きっての名所を持ってきた。さらに、先ほどの月の松から見るとどこかという、弁天堂です。この弁天堂とは何か、不忍池が何かというわけで、実際に見えるかと言えばちょっとはフェイクがありますが、京都の東側に広がっている湖ってなんですかっていうと、これ琵琶湖ですよ。寛永寺は東叡山っていうふうに言われていますが、東叡山っていうのは東の比叡山です。つまり、京都の鬼門を守った比叡山のように、江戸の鬼門を守るところです。比叡山に見立てるとすると、比叡山っていうのは京都と琵琶湖の間であって、その琵琶湖の真ん中には竹生島っていうのがあります。これは大阪城の一部を移築したと言われる寺社に弁天様が祀られている島です。当時はここ道が無かったのですが、不忍池の中の船で渡る小島に弁天堂を作ったのです。まさに京都きっての名所から琵琶湖の名所を臨むっていう構図をここで再現しているのです。さらに、この周りには吉野から持ってきた山桜をたくさん植えるわけです。当時、田舎だった関東の人からすれば、吉野、清水寺、竹生島っていうのは、まあ憧れの文化の先進地の名所です。そういう名所を持ってきて、しかも桜が咲く所を庶民に開放するのです。「徳川幕府すごいなあ」と、関東の人は思うわけですよ。しかも自分たちに楽しみを与えてくれる。そういう存在として、浸透していったのです。

そうすると、明治新政府の側にとっては厄介です。先ほどもあった通り上野は、東の守り、これ鬼門の守りでもありますから、まさにここに立てこもった彰義隊による戦争が1868年に起こります。彰義隊はすぐに壊滅しますが、しかし、上野はやはり徳川の旧臣がここで立てこもるような、徳川の地っていう思いが庶民にも強いのです。この上野のイメージを、明治新政府は何とか上書きしていかなければと考えたんじゃないでしょうか。それでやったことが、これです。これ実は天海さんと同じことをやっているんです。どういうことかと言うと、江戸初期の文化先進地は京都・滋賀ですよ。だから天海は京滋の名所を持ってきて文化政策をした。一方、明治時代の文化先進地は間違いなく西欧、ヨーロッパです。ヨーロッパの文明っていうのをこうやって、持ってくるわけですよ。もしかしたらそれを持ってきた人は誰かという、ここのある通り、菊の御門がある人、つまり皇室ですよ。ね、今まで徳川將軍家が江戸に文化を持ってきた存在だったのを上書きして、天皇家が、明治新政府が、新しい文明改革を東京にもたらしまし

た、ということになる。東京の市民は単純ですから、そこでもう場所のイメージが上書きされていくのです。けれども、明治政府が江戸幕府と同じことをして上書きしていくという手法をとったという事実は、上野という地がいかに文化政策の場所として重要だったかということを示していると言えると思います。

またもとに戻りますと、もう少し経っていくと 1990 年代以降、今度はインバウンド観光を意識する時代になる。そうすると、日本を、海外にプレゼンテーションする場として位置づけられていくように立場が変わっていく。いずれにしてもこの首都の中の文化の場所として上野公園というのがあったということには変わらないんです。ただ、それで一筋縄ではいかないのがやっぱり上野なんです。それは何かというと、この上野は交通の結節点であるということなのです。まさにこの上野駅というのがあって、上野公園は文化政策の場であり続けたわけですが、一方で上野公園のそばに広がる広大なパブリックスペースでもあるわけです。でそうすると何が起こるのかというと、これ社会変動の度に、難民が避難してくるといいうアジールになる側面をどうしても持つということです。

国家の文化的な顔であるにもかかわらず、難民のアジールでもあるという極端な両面性が出てくるわけです。しかもそれが、元々北の玄関口だったんです。東北、北海道、それから北陸、信越。日本の中では貧しかった地域です。ここから集団就職とかで人がやってくる、上野駅はそういう場だったわけなんです。1970 年代に京成スカイライナー開通で空の玄関口にもなる。で、1980 年代に今度はバブル期になると、日本は豊かになって、東北や北海道から集団就職で来ることも出稼ぎで来ることもなくなりました。そうすると労働力が不足する、どこから来るか、アジアですよ。で、アジアから最後に来たのが実はイラン人なんですよ。バブルの時。なぜかというところ戦争をしてたんですよ。1988 年まで戦争をしていたのです。イラン・イラク戦争しているの、イラン人が日本に来れるようになったのは 90 年頃からです。なので、バブルの最終盤に来た人たち。この人たちは最終盤に来ているから、日本の中に社会資源がない。なので、しかたがないので上野公園に沢山集まって、ここで情報交換をする場を築いた、ということなのです。これを見ていくと、結局この高度成長期の国内の周辺からの流入の代替として、グローバル化時代の海外の周辺からの流入になっている。そのときにまた、上野駅も同じ機能をずっと果たしているということを示しています。

先ほどのイラン人の写真がここにもありますが、ここで西郷像のお話も先ほど荒木さんからもありましたので、その話だけしておきます。

この集団就職の時代にしても、西郷さんの像の所は、すごく重要なポジションになるのです。不思議なことに。これは、震災、ですよ。先ほどこの写真（西郷像に避難民の紙が貼りつけられている写真）見ていただいたかと思いますが、西郷さんの所にもものすごい避難民が集まってくる。次の時代。次の大きな社会変動が震災です。この震災の時にもここに子供たちが座って、いわゆる孤児が座るのですが、それだけではなく、ここに、西郷像の前の階段の所に、娼婦、がですね、男娼も多かったんですけどすごく多く、沢山立っていたという記録も残っています。ここなんですよ。この同じところに、先ほども見たように、90 年代にはイランの人たちが西郷像の所に、その階段の所に集中的にいたんですよ。

西郷さんっていうのは、明治の元勳ですよ。最初に設計されたときは、確かにここを目指して、人が上がってくるような場だったんです。しかし、今、上野公園を目指す多く人は公園口から入るので、西郷像は公園の動線から外れたところに位置することになっています。そのために、学生を連れて行っても西郷さんがどこにあるのか、写真で見たことはあっても実際行ったことあるっていう人はほとんどいないっ

ていうことが起こるのです。

これは実は面白い話で、なんでそんなことになったのか、っていうのを、最初のスライドに戻って見ていくと、この映像は10年前の映像ですが、この建物覚えている方いらっしゃいますか？「聚楽」とかが入っていた「上野百貨店」という場所ですが、再開発されて「3153」になって、さらにコロナ禍以降にテナントが変わってガチ中華のお店が入ってますよね。それはそれとして、ここに建物ができたために西郷像の位置づけが変わったんですよ。

どういうことかという、戦後すぐに、この上野広小路に多くの露店が出ました。露店をやってる人たちのほとんどは、戦地から引き揚げてきた人達でした。ただ、昭和23年くらいになってくると今度は占領軍によって、この露店をクリアランスしようっていう話になったのです。この露店を整理する。すると、ここで商売をしていた人は行き場が無くて、大変です。そんな時に、東京府、当時の東京府の都市計画を担っていた、石川栄耀っていう有名な方がいたのですが、この人がすごいことを言い出しました。上野公園っていうのは東京の公有地ですし、今でも都の公園です。その公有地は都が管理しているわけですが、その公有地の下をくり抜いて、そこにビルを作って、そこに露店を全部収容したらいいじゃないかということを行ったのです。ものすごく大胆なことです。それが、この西郷会館。上野百貨店の始まりです。元々、階段がひろく広がっていて、そこに花壇があって、西郷像がここにあるのです。ですから、西郷さんを見ながら階段を上がって行けたのですが、そこが露店が集まるお店になったために、完全に視線が塞がれたのです。そのために上野駅から下に降りると西郷さんがどこにあるのか分からなくなってしまっただけで、そうすると今度は、西郷像周辺が人々の動線から外れたエアポケット的な空間となり、ここで、娯楽が商売をしたりとか、高度成長期に地方から流入してきた人が、ここに溜まったりとか、イラン人もたむろしたりっていうようなスペースになっていった、というとても不思議な歴史を持っている所なのです。

それでは次、アメ横の話も出てきたと思いますが、アメ横は今、すごく多文化的な街ですが、ここは実は、最初からものすごく多文化的な所でした。アメ横は、戦後75年、歴史のある街なので、まあ普通に考えれば十分に古い。今では戦後の香りを感じられる、東京でも唯一と言っていいような街になってきています。とはいえ上野の中では、新参者です。上野は江戸時代から続いている街です。その中で唯一、戦後になってから形成された商店街がアメ横なのです。それまでは単なる鉄道用地でしたから。戦後、その鉄道の周りは全部疎開させられて焼け野原になっている。つまり、これだけ便利なターミナル駅の脇に膨大な土地があったわけです。そこに色んな人が入ってきた。旧植民地からの引揚者を中核に、周辺の農村部のカツギ屋さん、行商の人、ヤクザ、関西でいわゆる徴用されていた在日コリアンの人たちとかも、どんどん横一線に入ってきた、本当に、多文化的なヤミ市が起源なのです。

先ほど荒木さんからお話もありましたが、その時に売れる物を買うっていうのが、それ以降のアメ横のポリシーなのです。つまりはアメ横には老舗がない。ずーっと同じものを買っているという老舗があまりないんですよ。で、その時に売れる物を買うっていうのは、例えば何かというと、これ。年末のアメ横です。年末のアメ横では、カニとマグロばかりを買っているイメージっていうのがあると思います。これ実は、乾物屋さんとか靴屋さんの軒先でカニとかマグロを買っているんですよ。実はアメ横には、そんなに生鮮食品店がないです、普段は。

これは、僕がアルバイトしている時に撮った写真ですね。お店の中から撮っています。ここも乾物屋さん

でした、普段は。だけど年末だけはカニを、もう日本で一番カニに詳しいような顔をして売るんです。まさに、その時に売れる物を売る街の面目躍如なのですが、そもそも、なぜここが年末賑わう街になったのかというと、この写真分かりますか。この写真は、高度成長期の時、上野駅前に立ったテントです。なぜかかというと、帰京する人達、とくに東北方面へ帰京する人たちのための臨時列車が沢山出て、その切符を買うためにずっと並ぶ。でその列のためのテント村っていうのができたのです。切符を手に入れるまでに5~6時間かかったようです。当時。そして、その待ち時間の間に、近所で、買い物をして、新巻鮭（あらまきじゃけ）買うんですよ。

故郷に錦を飾るといことです。最初は新巻鮭、その後マグロになったりイクラになったりしていったのだと思いますが、正月用品が帰京する人たちに売れそうだってなると、一斉に商うがアメ横です。これがアメ横の1960年代の、今の正月商戦の最初の始まりです。

こちら先ほど出てきた、あのアメ横センタービルの地下。ここも、アジアの街みたいになっています。これは、実は、エスニックタウンとして始まった所ではないところがユニークです。元々、舶来品を売っている、食料品店がありました。ここでは元々、米軍の横流しとかも売っていたのですが、1980年代くらいになると舶来品なんて呼ばなくなります。どこに行ってもピーナッツバターはスーパーマーケットで手に入るようになっちゃうじゃないですか。そうすると、そんな商売していてもしょうがない。じゃあどうするか、となり、その頃、日本には在住外国人って増えてきているんです。この在住外国人の人が、こんな物置いてくれ、こんな物置いてほしい、と言うようになってくる。そうしたらこっちの方が売れんじゃないか、となり、だんだんだんだん商売変えしていき、まあアジアの街になっていった、というのがこのセンタービルの地下です。

ここもケバブ屋さんとかもすごく多いと思いますが、これもどんどん観光の街に変わってくると、安売りの街ということでは、今ディスカウントショップは日本中どこでも郊外にたくさんあるわけですから、安売りの街から観光客向けの食べ歩きに変わっていく。あるいは物販店でも、ネットと連動したような街になっていっている、というのが現在です。

その、売れる物を売る、の最たるものがまさにこの光景。この閑散としているアメ横、これいつか、見てもらえるとわかると思いますが、2020年の5月に撮った写真です。最初の緊急事態宣言の時です。ここを見てください。マスク、アルコール。当時を思い出してください。3年前。マスク手に入らなくなりましたよね。その時、アメ横ではめちゃめちゃ売っていたのです。それぞれ独自のルートがあって。ベトナムの工場から直で輸入してくるとか、怪しげなマスクがそこら中にありました。人は来ないけど、とにかくここに居ればマスクは手に入るという、まさに、売れる物を売るっていうアメ横のポリシーがこの大災害の中で発揮されたわけですよ。

このように、上野の山と、上野の山の代名詞的存在のアメ横とみえてみると、そのいずれも、見かけ上、表面上はだんだん新しくなって大きく変わってはいっていますが、ずーっとその、江戸・東京全体の中での役割だったり、商売の伝統だったりみたいな根幹の部分では、ある意味連綿と変わらないものが繋がっているのが上野だというのがご理解いただけたかなと思います。

結果として上野全体でみるといまだどんな感じになっているのか。色んな要素があって、アメ横、上野公園。国家の文化政策があり、そのとき売れるモノを売るマーケットもあり、ほかにも今日は触れませんが歓楽街や外国人の多いエリアもあり、さらに上野駅がある。

これをロンドンに比して考えてみましょう。北の玄関口の上野駅に比するのは、スコットランドから来る列車が着くキンデスクロス駅です。えっとハリーポッターの駅ですよ。キンデスクロス駅。ロンドン動物園はここ、リージェントパークの中にあります。それから、上野公園には、この大英博物館に値する博物館が沢山あるわけですよ。そしてロンドンのチャイナタウンに値するようなエスニックな街として、東上野にはコリアンタウンもある。若者の古着とか売っているお店はアメ横にも多いと思いますが、にぎやかな若者向けマーケットのあるカムデンタウンという街がこちら辺にあります。それから忘れちゃいけない、藝大。これは、ロンドンで言えば、ハイパークのそばのロイヤルカレッジオブアート、ロイヤルカレッジオブミュージック、これらが値するでしょう。

ロンドンって、横長です。横長でこのくらいの範囲で、サークルラインという、東京でいうところの、山手線に値する地下鉄が走っていますが、その、サークルラインの範囲と同じくらいの都市要素が、この半径 500 メートルのウォーキングディスタンスに過ぎない上野にはもう全部、入っている。これがやっぱり、上野のすごいところで、しかもそれぞれが、その要素が江戸・明治から現在まで残り続けているというのが非常に重要なポイントだと思います。社会学の古典的な定義では、都市とは大規模で密集していて、異質性へ分化していて、流動的な場所です。この定義に従えば、まさにこの上野ほど多様な都市機能が高密度で集積して流動的な街はなかなかありません。そういう意味で世界的に非常に稀にみる都市的な街だと言えます。けれども、今、まちづくりということを僕も今やっていると、あまりにも多すぎる都市的資源の中にある意味溺れちゃうようなところがあり、明確な方向でのまちづくりが少しばかり難しいという贅沢な悩みを抱える街でもある。今日は、そんな上野という街の特性を、みなさんに知っていただける機会になっていたら嬉しいです。

〈拍手〉

終わりに

熊谷：ありがとうございました。クロストークもお聞きしたかったのですが、お時間となりましたので、ここまでとさせていただきます。荒木さん、最後に今のお話を聞いて一言お願いします。

荒木：私は五十嵐先生の御本を読んでいたのですが、初めて聞くお話ではなかったのですが、あらためてすごく面白くて。上野がすごく面白いっていうことを他の人にもぜひ知ってほしいっていう気持ちがあったので、今日は沢山のの人に五十嵐先生のお話を聞いてもらえて、とても良かったです。すごく満足しています。

五十嵐：ありがとうございます。一言だけ、僕も質問させてもらってよろしいですか。

荒木さんにお聞きしたいことがあったのですが、リサーチをして、そこから作品を作るという意味では、やはり社会学と似たところもあると思うのです。ただ、その発想の方向性は当然違うわけで、僕ら社会学者にとっては、都市に関する色々な理論があります。ただそういう理論的な視座は重要なんですけど、上野という街は、その理論を全部裏切っていくようなところがあって、最初はこんなもの書こうって考えてリサーチをしても、いろんな人の話を聞いたり調べたりしていくうちにその理論が全部壊れて、全部また新しく作るみたいなどころがあります。だから、あまり理論的な予見にとらわれないように、っていうところに気を付けていかなきゃなってしまうんですけど、荒木さんがリサーチしながら作っていく時に何か

気を付けていたことはありましたか？

荒木：気を付けるということはなかったのですが、自分の興味がある部分をリサーチしていきました。アート作品なので、それで何かを明確に言わないといけないということでもないのです。

上野をテーマにしているのですが、そこからもっと大きなこととか、人々が行き交う様子とか、人の精神とか記憶とか、そういうところにも意識を持っていけて、例えば、上野の歴史などを全然知らない人が見ても、入っていただける作品を目指しました。でも、そこからもうすこし、これは何が言いたいのだろう？と思ったときに、今日のスライドの一コマにあったことを知ってもらえて、さらに作品や上野の見方が変わるといいかな、というような感じです。アート作品なので、抽象的なところもあるのですが。

五十嵐：ありがとうございます。でも、イメージーションが膨らむ作品だったなって、改めて思っています。ありがとうございました。

熊谷：ありがとうございました。時間が少し伸びてしまいましたが、これでアーティスト・トーク第1回を終わりにします。今日のお話を聞いて、ギャラリーAの作品の見え方が少し変わってきたり、まだ展覧会をご覧になっていない方は今日のお話の視点から見ていただくと面白いものが見えてきたりするのではないかと思います。今日、個人的には、五十嵐さんの「バンドメンバーが入れ替わってもずっと続けていくバンドみたいなのが上野なんだ」というお話をとても興味深く受け取りました。だから上野には、多様性があって、受け入れるし、出ていくのも厭わないで、どんどんメンバーが変わっていく。すごく面白い場所だということを、改めて感じました。

最後にみなさまから、お二人に、盛大な拍手を送って頂きたいと思います。

ご参加ありがとうございました。

〈以上〉